あとがき

今回の山田正亮展は1970年代後期の絵画をおみせするものである．この展覧会は一昨年6月の山田正亮展1970年前期の絵画と対応するもので，この2展をみることにより山田正亮の1970年代の作品の全貌が示されることとなった．

カタログのテキストは山田正亮の作品を長年研究され，1970年代前期の絵画展のテキストをお寄せいただいた早見堯氏に「流動する絵画」と題するエッセーをご寄稿いただいた．厚く御礼申し上げる．

一昨年の山田正亮展1970年代前期の絵画をみて，私は不思議な体験をした．展示会場である当画廊の空間に靄（もや）が立ち込めたのである．目をこすってよく確かめたが，やはり靄が立ち込めている．一体これはどういうことか，しばし立ちすくんで，会場を眺めたものである．勿論，本当の靄，水蒸気が発生したわけではない．当画廊にそんな発生装置などあるわけがない．すなわち，この靄のごときイリュージョンは山田正亮の作品群から発生したものなのだ．これはスゴイものだなと思わずうなった．この体験は数度に及んだことを付け加えておきたい．

私は長谷川等伯の杉木立の霧，靄の画かれた作品を思い起こした．あの作品は具象絵画である．山田正亮の作品は色面の絵画，ミニマルアートの抽象絵画で，直接，霧や靄を描いたものではない．しかるに山田正亮の作品群から靄が発生しているのだ．つまり山田正亮の作品はまぎれもなく日本のウエットな湿度の高い風土から生まれたものであることを示している．山田正亮はまさしく日本が産んだ作家なのだ，と私は実感したのである．

これは山田さんに直接きいた話であるが，山田さんはチューブのナマの色は使わない．ひとつの色でも何種類かの色をよく混ぜ合わせて作る．練り上げられたデリケートな色彩は山田正亮の特色である．それらの色彩の配分，配置とそれら作品群の響き合いが，靄を発生させた原因なのだ．ナマの色彩からは靄は発生しない．欧米の作家とのなりたち，風土の差異を感ずるのである．

また，一点一点個別に作品をみるのと，それらの作品を一堂に集めてならべてみるのとでは，みえ方が違ってくる．一つの作品でみえてこなかったものが，並べてみるとみえてくる．展覧会の面白さはそこにある．

さて，今回の1970年代後期の絵画はどのようにみえてくるか，私には楽しみである．プロセス的にみると山田正亮の70年前期の絵画は禁欲的でスタティックなしごと，つまりミニマルアートであった．今回の後期の作品は，次第にそれが解けてきて，分割的な格子が生まれ，多色になり，階段状のラインが入ってくる．そしてさらに時が進むと，格子に囲まれた空間が動き出してくるのである．その動きは80年代にさらに強くダイナミックになるが，その前兆がほのかにみえてくるのである．

1968年から77年まで10年間，山田さんは個展をしていない．その沈黙の10年間の最後の部分が，今回はじめて展示される．山田正亮のしごとに関心をお持ちの方には興味深いところである．

最近，山田正亮のしごとは海外から注目を浴びている．アメリカ，ヨーロッパの画廊から，山田正亮展の申入れがあるのは嬉しいことである．山田さんの一層のご健勝を祈るものである．

1991年7月20日
佐谷画廊
佐谷和彦